



### 松本城と鉄砲

松本城は鉄砲伝来の50年後に築かれた城である。それ故縄張りや構造は鉄砲戦を想定して築城された城である。天守をはじめ城の周囲をめぐる石垣や土塁の上にかかる塀や壁は銃弾に耐える厚い塗りごめづくりで、弓矢や鉄砲を放つための銃眼(矢狭間、鉄砲狭間)が数多く設けられている。天守の狭間の数は矢狭間60、鉄砲狭間55合計115の狭間が外に向かって開いている。狭間の構造は、広角に敵を狙えるよう、また死角がないように配列を工夫したり、間隔をとったりしている。

天守をとりまく内堀の堀幅が60mあるのは、鉄砲の有効射程距離を考慮しての設計である。石落しの数は11個を有し、他城に比べて多いという。いざの戦いで石垣をよじ登る敵兵に下むかって銃口が火をふく。

まさに鉄砲戦を想定しての松本城である。



### 松本城鉄砲蔵

天守2階の「鉄砲蔵」に納められている鉄砲や装備品は、文化庁の鉄砲刀剣審査員、鉄砲史学会会員であり、ライフル射撃及び前装銃射撃連盟(火縄銃射撃)の射手でもあった故赤羽通重氏とか代子夫人(共に松本市出身)が30余年を費やして、全国をまわって収集したコレクションである。

天守2階に昭和63年6月4日開設された「松本城鉄砲蔵」は、同年2月松本市に寄託された赤羽夫妻の収集された鉄砲106挺、その他多数の装備品・古文書からなる貴重なコレクションが発点となった。

翌年平成元年の6月4日には「松本城鉄砲蔵赤羽コレクション会」が設立された。文化財としての鉄砲とその歴史を生き生きと後世に伝えるために研究、保存、活用を希望された赤羽氏のご意志

を尊重していかなければと決意を新にした。

その後赤羽氏は火縄銃などの火器を主力兵器を想定して築城した松本城に、これらの銃器類が収納・展示されることに深い意義があると考え、平成3年4月と同12年10月に、貴重なコレクションを松本市へ寄贈した。

コレクションの中心は、天文12年（1543）鉄砲が伝来してから、江戸時代中期までに日本で製作された火縄銃である。日本の鉄砲の中心的製作地であった江州（滋賀県）国友村の「国友筒」や泉州（大阪府）堺の「堺筒」などをはじめ、歴史的文化財としての価値の高い鉄砲141挺（公開後同氏より追加寄贈された35挺を合わせて）、装備品283点、文書類465点などがある。



「鉄砲蔵」は寄贈者の意図を踏まえて、鉄砲伝来に始まるわが国の鉄砲史、とくにわれわれの祖先がこの新奇な武器を手にするや直ちに独自の技術でその製作に踏み出し、数々の工夫を加えて優れた火縄銃を開発した経過をできるだけ理解しやすいように展示してある。また市立博物館地下の展示は、鉄砲の歴史がたどれるように展示を試みている。ご鑑賞ください。

平成9年の総会で特色ある銃について説明されるご夫妻



「わたしたちの松本城」19ページ訂正

松本市出身の故赤羽通重<sup>みちしげ</sup>さんは、妻か代子<sup>かよこ</sup>さんとともに、数多くの火縄銃、装飾品・関係文書<sup>そうしよくひん</sup>などを収集しました。141挺の鉄砲などの貴重なコレクション<sup>ちよう</sup>を、鉄砲戦にそなえた松本城に展示して、小中学校の児童生徒に見てもらいたいという願いから、赤羽さんは松本市<sup>きせう</sup>に寄贈しました。市は1989(平成元)年に「松本城鉄砲蔵」を開設し、1999(平成11)年3月に松本城天守2階と日本民俗資料館<sup>みんぞく</sup>とに分けて展示しました。天守には天下統一を早めたという火縄銃の歴史がわかりやすく展示されています。

松本市立博物館に訂正

1988(昭和63)に訂正